

○酒井豊子* 沖原タツヨ* 田村照子**

(*放送大 **文化女大)

目的 乳ガン手術経験者を対象としたアンケート調査の結果、約1/3の人が手術後に汗が多くなったと感じており、乳房切除部にあせも、むれを経験している人、ブラジャー内に湿りを感じている人が少なくなかった。本報告では、乳房切除部分における水分蒸散とブラジャー内微気候について、着用実験を通して健常側との比較により特徴を探る。

方法 ①乳房切除者 (sub. O) が術側に人工胸に併用している人工胸カバーと汗取りを、健常側にも装着し、さまざまな作業前後のカバー+汗取りの質量変化から、術側と健常側の水分蒸散量の違いを推定した。また、比較のため健常者 (sub. B) の左右の胸にもカバーと汗取りを装着し質量変化を測定した。カバーと汗取りはあらかじめ25°C65%R. H. で調整して用いた。②神栄 (株) 製平型温湿度センサーをsub. Oの左右の胸の皮膚面ならびに肩の衣服表面に貼付し、それぞれの部位における温度・湿度の変化を継続的に測定した。

結果 (1)sub. Oの健常側ならびにsub. Bでは、カバー+汗取りの質量は着装によりむしろ減少した。体温により吸湿を上回る放湿が行われたと考えられる。(2)sub. Bでは左右の質量減少は同程度であった。sub. Oでは術側の質量が増加し、放湿より吸湿が大きい結果を示した。術側の水分蒸散量が健常側より多いと考えられる。(3)術側の質量増加は作業の程度や環境温度により変動した。(4)温湿度センサーによる測定結果では、温度は術側が常に2°C程度高い。湿度は健常側では作業等により上昇しても安静時には低下するが、術側では人工胸着装とともに非常に高湿度となり、一旦上昇した湿度は人工胸を外すまで低下しない。吸湿性、通気性の乏しい人工胸が放湿を妨げていると考えられる。